



千の言葉と

秘密

R18
ADULT ONLY



千の言葉と二人の秘密

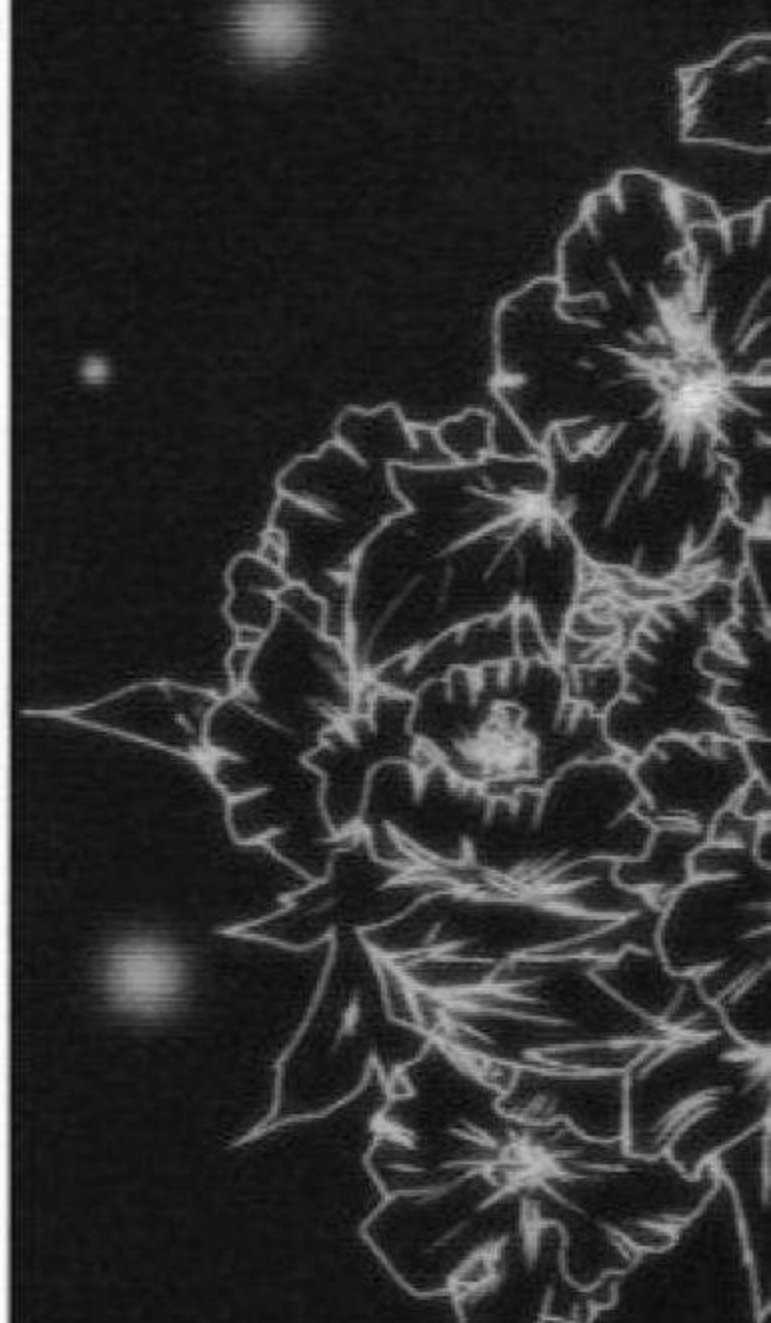
千の言葉と二人の秘密

■ 秘密……サキ

■ 男子高校生の性事情……トモエ

■ なつのひ……MAYA+

■ 秘密の秘密……サキ



奥村くん

思慕...

思うんや...ケド

近ないかなうって

.....Conty's
STAY+STAYERS



ナンカ文句あんののかよ



あとコレ...
段々絞まってきた感じ



いや...ナイです

あかん 完全に
酔うてる

それ 中身
知ってて
飲んでる?



んや

何だか知らねえけど
今無性にコレが飲みたい
気分なんだよ!

アハハ...せやろねえ...

アハハ...コレ?



奥村くんかて寂しいよねえ



別に……そんなんじゃないよ
俺だって自分がサタンの息子なんて
信じたくねえし……

あないに皆に避けられたら
俺かて寂しいし……

……やし、
反則や……何急にしろらし……
願してん……

寂しいなら
甘えてもええよ……

……

ゆる……



コナン……

おっ



はあ？

オマエに？

おまへに
おまへに
おまへに

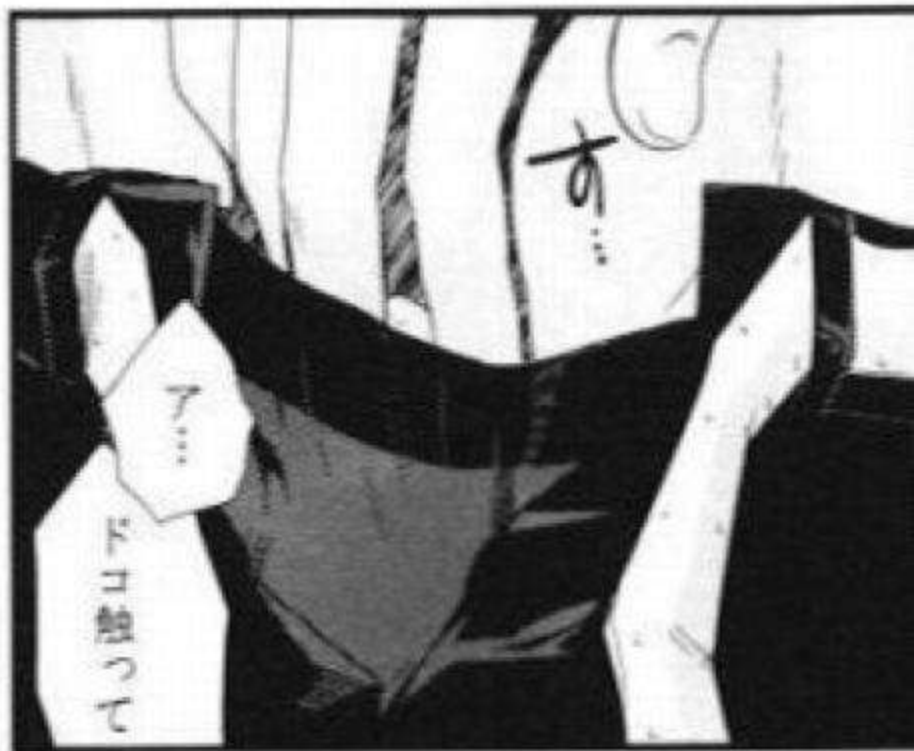
れでき
かつんぐり
ランキンア

うっわえげつな……
前言撤回や

今っ











あ、んたはなに



……またやっただの……

出すだけ出して
寝てもーた……



せめてカッコイイやつ
ランキング
上げてもらわんと
割りにあわへんなー

……

あつはっは
やっぱりなー

……覚えて
ねー

からの

男子高校生の性事情

手で携帯を握り口を開く。

「誰や」

「こっちのセリフだつーの！」

「いや、誰でもええんや…たすけて」

「…？その声は志摩か？どうした？」

「俺の部屋に虫がおる」

「なんだ、そんなことよりさ、お前遊びにこない？」

「全然そんなことと違うけど遊び行くわ、今すぐ出る」

「急がなくても別にいいぜ？ゆっくり用意しろよ」

「奥村君、わかって言うてるんやろうけどあえて言うわ、

出ていきたいんや！」

「あはは、待ってるよ」

耳と携帯の画面との間に、つう、と汗が流れた。電話の回線はすでに途切れている。自分のカギと財布はベッドに放り投げたような記憶があつて、けれど今、志摩がへたりこんでいる場所からベッドはとて遠く思えた。震える腕を床についてなんとか立ち上がると、深く深呼吸をして志摩は部屋を後にした。廊下を歩いて日光の照りつける屋外へ出ると、一度伸びをして、部屋の同居人に電話をかけた。

「え、じゃあ鍵かけなかったのか？」

目の前でそうめんをすすする焔は、勝負にもらったヘアピンで前髪を留め、露出した眉毛を持ち上げて言った。

「同室のやつには連絡したし、問題ないやろ」

掌をばたばたと扇いで、志摩は笑う。机に置かれた水の入ったグラスが汗をかき、中にある氷がからんと音を立てる。ふうん、と焔は言つて、またそうめんをすすった。

志摩の目の前にはそうめん用のつゆが入った器がある。

瞼の上を感じる布が、目に入るはずの光を遮断する。先ほどから聞こえる布ずれの音から、今日の前で何が起こっているのかを想像して、こくり、と唾を飲み込んだ。季節は夏、蒸し暑い部屋でじわりと頭皮に浮かんだ汗が、額を滑り、布に吸い込まれていく。

「動くなよ」

目の前にいるはずの奥村焔はそう言つて、目隠しされた志摩廉造の汗ばんだ肌に触れた。

なぜ、こんなことになつたのか。時は数時間遡る。暑さの厳しい休日の昼、志摩は部屋にこもつた空気を入れ替えようと窓を開けた。ふわりと漂つた風はゆつたりと肌に貼りつくような熱を持っていて、外も暑いなあともには出さずに感想を述べた頃、ふうん、という音と共に黒い物体が頬のそばを横切つた。それはいったい何であるのか志摩にはわからないが、とにかく虫であることは確かだ。咄嗟に後ずさり部屋の端まで逃げると、都合よく床に落ちていた自分の携帯を握りしめ、どこを押したのかわからないけれど、表示された名前に電話をかけた。

「…ん？あれ？もしもし？あれ？電話？」

電話の向こうの誰かは焦つたような声で、そう言つて黙つた。志摩はどうにか虫の動きを目で追つて、震える

けれど、彼がそれに手をつけた様子はない。彼が男子寮を出て、熾とその弟である雪男が暮らす旧男子寮にいた頃、窓の前でぼんやりと外を見る熾と目が合った。彼はすぐに手を振って笑うと、厨房にいるからな、と言って姿を消した。そういえば、今日誘われた理由を聞き忘れていたことを思い出して、志摩は言われたとおりにすぐに厨房へと向かった。

そうめん食べる？と厨房で笑う熾に、志摩は断りの言葉を言う。残念そうな顔に大きな罪悪感が芽生えて、部屋に虫が侵入する前、コンビニで買ったおにぎりを食べた事を後悔した。

「そういえば、暇やったん？」

「ん？」

「何で誘われたんかなあと思て」

「あ、今日さ、本当は雪男としえみの店に行く予定だったんだよ」

「ん？あ、杜山さんのお母さん商売してはるんやったっけ」

「うん」

「で？」

「あ、で、雪男がなんか任務になっちゃったとかでさ、出かけちゃって行けなくなっただよ」

「何でや、奥村君一人で行かばつたらええやないの」

「だめなんだよ、あの店、俺だけじゃ入れねえの」

「ふん、そうなんや」

「それに雪男も、行けなくなっちゃったので、また次の機会にでも」とか電話しちゃってんの」

熾は持っていた箸を置くと、両手の人差し指と親指で丸を作り、それを目に当て、背筋を伸ばし雪男の声真似をした。それを見て、志摩は噴き出し、笑う。

「ぶつ、なんやそれ、若先生の真似？」

「若先生？」

「弟さん」

「そうそう、似てるだろ？」

「そっくりや」

「兄さんはそこを絶対動かないように！」

「あはは、似とる似とる」

熾は満足げに笑って、再び箸を持った。

「そこで電話かけてきたからさ、お前が。まあメールしようと思っただけだな」

「そうやったん？」

「メール打ってたら電話かかってきて、気付いたらなんか出てた」

ああ、それで、と志摩は記憶をたどった。電話をかけた時、熾が焦っていたのはそういう理由だったのだ。

「携帯まだ慣れてないん？」

「うん、前よりはわかるようになってきた」

「パソコンとか」

「全然だな、そっちは」

そうめんの入った器が空になり、今すすった麺が最後だったように、熾は箸をおいてすぐ傍にあったグラスを手を取った。氷の溶けた中身を胃に流し込んで、ごちそうさま、と笑顔で手を合わせる。

「教会に住んでたんやろ？」

「おう」

「何して遊ぶん？」

「何して？別に、何もしてなかったな……手伝いとか」

志摩は水を飲み、記憶にある教会を呼び起こした。手伝いと言えば掃除や洗濯、食事の用意などだろうか。掃除といえば、よく寺の掃除をさせられたものだなと、記憶

が京都の寺に飛んだ。

「俺友達いないからさ」

はは、と笑って、熾は目の前にあるグラス以外の食器を手を持ち、片づけをはじめめる。厨房に消えた熾は、椅子に座った志摩からは背中しか見えない。蛇口から水が出る音が聞こえ、部屋にはそれ以外音がないように思えた。水を飲み、額に浮かんだ汗を腕で拭いた。暑い。志摩は立ち上がって、厨房に入る。奇麗に片付けられた食器に触れようとして手を伸ばすと、すぐに熾にその手をとられた。

「あ、触らないほうがいいぞ」

「え、なんで」

「いろいろあんだよ、いろいろ」

「……そお」

触れた手が冷たい。姿勢を変えシンクに肘をつき、頬杖をつく。もう片方の手を蛇口から出る水につけると、ひんやりと気持ちがいい。

「うおい、邪魔すんな」

「せやかて、暑いんやもん」

「我慢しろ」

「なあなあ、奥村君さ」

「なんだよ、早く腕どけろよ」

「ずっと不思議やってんけど」

「おう」

「興奮したとき、どうしてんの？」

「……」

「……」

「は？」

たつぷりの間をとって、そう驚くと、熾は手をどけ、志摩から少し距離をとった。みるみる顔が赤くなって、自

分が言いたかった事はきちんと伝わったようだ、掌を冷やしなから思う。

「弟君と同室やし、一人きりになる事なんかほほないと違う？」

「そ、うだけど」

「せやったらな、こういうときしか出来ひんやんか」

「う、」

「どないしてんの？」

志摩の目が真っ赤になった熾をとらえる。本当に、ただの興味本位だった。中学生頃になれば、そういう事もわかってきて、高校生ともなれば、一人で処理出来なければおかしいと思えた。もちろんこれは、志摩の中の常識だけれど。熾は、なぜだかいつも、雪男とともにあると思えた。二人だけ旧男子寮であるし、同室だと聞いた。そうなってくると、一人きりの時間などほほないのではないだろうか。それはもちろん志摩にも同じ事が言える。唯一のプライベートである寮生活は、同室の人物のせい。一人きりというわけにはいかない。男同士だから、オカズである雑誌を共有することもできるし、ちょっと外出てろよ、なんていう事も出来るけれど、この兄弟はどうなのだろう。

しかし今、目の前にいる熾の反応を見れば答えはわかる。恐らく、そういう話題はないのだろう。

「今度エロ本貸したろか？」

「そ、そ、……いや、……」

「貸したかて若先生に見つかれば没収される……？」

「……そうかも……。つうか、あんま、そういうのないから」

「え？」

「家に居る時も、あんまりなかった、そういうこと。雪男がしてるのも、見たことねえし」

「ほんまに？」

「ほんま」

燐は志摩の言い方を真似て言うと、出しっぱなしの水を止めた。

しん、と部屋に静寂が戻る。

「そしたら、奥村君はどうしてるん？」

「…、お前、何でそんな…そんなこと聞くんだよ」

「俺坊主やし、一応、坊も子猫さんもそんな話する思う？」

「いや、まったく想像がつかねえ」

「せやから、話す相手がおらへんの」

「しなきゃよくない…？」

「したいんやもん」

「志摩はほんとうにどうしようもないエロ坊主だな」

「ほめてるん？」

いややわあ、と少し高い声で言う志摩に、燐は笑った。

燐と雪男の部屋は、志摩の部屋と同じように窓が開けられ、少しだけ涼しい。いつまでも厨房で立ち話もなんだから、と部屋まで来たはいいけれど、途絶えた下ネタ話はそう簡単に再開できるものでもなくて、二人はベッドの前に座り込むと、あちい、と声を出し、数分を過ごした。厨房から持ってきたグラスを床に置いて、グラスに伝う水分を見つめる。

「そういえば」

志摩が口を開き、燐は彼を見る。ベッドに投げたあつた漫画を団扇代わりに叩く。

「一つも持ってない？エロ本」

「…ない」

「どないしてんの？」

心底不思議そうな顔をする志摩に、おおよそ二十秒ほど間をおいて、燐は口を開いた。

「そーぞー」

「…何想像してんの？」

「言えるかアホ」

「いややう奥村君のえっちら」

「う、うるせつ！もうしゃべんねえ！」

「うそうそ、杜山さんとか？」

「いや、そういうのはちょっと、しえみは…」

そう言って燐は顔を赤らめた。恐らく少し想像したのだろう。

「俺も仲のいい女子はちょっと無理やなあ」

「だろ？」

「なんか申し訳ないわ」

「だからなんか、顔にモザイクみたいなの、かかってる」

「モザイク？なんやそのほうがエロない？」

「そうか？」

「そうそう…、…いや、想像したらようわからんわ」

「なんだよ」

「いや、せやかて、経験ないし」

「えーつと」

燐は立ち上がり、脱ぎ捨てられた制服の上に置かれたネクタイを取った。そして志摩の前に膝立ちして、こう、と言って志摩の目元をネクタイで隠す。視界が真っ暗になると、どう？と聞かれた。

「…あれやな、奥村君」

「え？」

「たぶん、これ、奥村君が目隠しせなあかんはずや」

「…あれ？」

「俺に想像させよーいう事やんな？ならせやろ？」

「……あ、そうか！」

「……と視界が明るくなつて、燐は言われたとおりに自分の目元にネクタイを巻くと、きちんと頭の後ろで縛った。」

「こう？」

（こう、って）

志摩はその光景を見ながら、小さく嘖き出した。根本的に、燐が同性である限り、いつも彼が想像している状況を再現することは不可能なのだ。志摩は燐の思考に笑つたが、しばらくして、困つたように眉を八の字にして、暑さなのか状況のせいなのか頬を赤らめた燐に、別の感情が湧きあがるのを感じた。

「AVのパッケージみたいや」

「へ？」

「手錠したら完璧」

「お前いつもどんなの見てるの？」

「ひ・み・つ！なあなあ悪戯してもええ？」

「えっ？だめ、だめだめだめ」

燐は一生懸命頭を横に振るけれど、それはまるでイイと言われているようで、志摩は燐のTシャツに手をかけた。裾を持ち上げようとした瞬間、燐の手が志摩の手をつかむ。

「まじで、まじで！だめ！」

「だめって言われると、したなるんが男やし」

「いや、ちよつと、待って」

燐は頭の後ろからぶら下がるネクタイの端を持って取ろうとするが、志摩にその手を掴まれ、だめ、と止められる。しかし燐には、Tシャツを冗談であつても捲り上げられては困る理由がある。

（尻尾ばれる、やばい、忘れてた）

焦りながらどうにか志摩を止められる理由を考える。志

摩を傷つけず、関係も悪くならず、なおかつやめてくれる理由。掴まれた腕に汗が滲んだ。

「し、志摩が目隠したほうがいいとおもう！」

ようやく飛び出した言葉はそんなものだったけれど、きつとこれはナイスアイデアだ。そうだ。志摩が見なければいいのだ。よく考えれば何がいいのかわからないけれど、この時はそれが最善だと思えた。

「何で？」

きよとんとした声が聞こえて、腕から手が外れる。急いでネクタイを取ると、強引に志摩を押し倒し、ネクタイを目元に押し当てて、

「くるしい」

「もーちよつと」

馬乗りになつてどうにか頭の後ろできつくネクタイを結ぶと、燐はため息をついて志摩から離れた。そうして、目の前にある光景に、今度は別の意味で焦る。一体ここからどうしたらよいのだろうか。

「奥村君」

「はい」

「そんで、どーすんの？」

「え？」

「いつもの、想像上の人らに、どうしてんの？」

「え？」

予想していなかった問いかけにまた焦る。そして、いつもの想像を思い出して、またどうしたらいいかわからずに志摩を見た。彼の眼もとは隠れているけれど、上がった口角が、彼が楽しんでいる事を知らせてくれる。

「えつと……」

目を泳がせ、声を出す。性の話を家族とも他人ともあまりしなかったことがないというのに、いつも自分がしている想

像を人に話せというのは、燐にとってハードルが高すぎる。口を閉じてそのまま動かない燐に、志摩はネクタイの裏で緩きをした。まつげがネクタイに触れ、すぐに閉じた。自分で作り出した状況だけれど、燐以上に志摩はどうしていいかわからなくなっていた。あんな問いかけをして、本当に燐が、いつもの想像通りの事をしてきたら、冗談だと笑って終わらせようと思っていた。それなのに、燐は本気で戸惑い、どうしてよいものかと思案しているようだ。

(断つたらええのに、なんでそんな真面目なん……)
小さくため息をつく。腹の上の燐がびくりと動いた。

(俺も、何がしたいんや)

もういいよ、そう言っただけで終わらせようと、志摩は腕を動かして、手に触れた燐の腕を握った。そして口を開こうとした瞬間、頬にあたたかい燐の掌が触れた。

「最初は、」

「え？」

「こう」

掠れた声が耳に届いた頃には、既に唇に、柔らかい感触があった。

そして時は冒頭に戻る。

「志摩、腕あげて」

「え、あ、うん」

汗で張り付いたTシャツが、燐の手によって脱がされる。肘が引っ掛かっているらしく、布が肌に食い込んで少し痛い。やがて腕が抜けると、頭を抜く拍子にネクタイが少しずれ、真っ暗だった目の前にほんの少しの光がさした。

「……」

目の前にあったのは、既に上半身が裸の燐だ。彼は真剣な顔で、顔から汗を一つ流して志摩のTシャツをたたんでいる。

「……奥村君で、白いなあ」

「は？……あつ、こら」

驚いた顔が志摩を見て、すぐにネクタイが直された。Tシャツを脱いだ際、尻尾は床に垂らしていたから、志摩には見えなかったようだ。

「見たらだめだろ」

ばさりと音がして、Tシャツが床に落ちた。そしてしばらく静寂があつて、窓の外から、セミの鳴く声が響いた。燐の目の前に、志摩の裸の上半身があつた。彼の裸の上半身など幾度か見たはずなのに、今日はなぜか羞恥心が襲いかかった。燐よりは少し焼けた肌は細く、うっすらと筋肉がついている。熱い風が露出した肌に触れ、脳みそがゆだっているのではと感じるほどに、目の前がくらくらと揺れた。志摩のこめかみから汗が一つ流れた。額から落ちたそれは胸を通り腹にとどまる。

「奥村君？」

「あ？」

「いや、動かんから死んどるんかと思て」

「生きてるけどすげーあちー」

「水飲んだら？」

「ああ、そっか」

手を伸ばし床に置いてあつたグラスをとった。ごくごくくりとすべてを飲みつくして、もうひとつのグラスに手を伸ばす。

「お前も飲む？」

「うん」

ほんの少し開いた志摩の唇に、グラスを当てようとして、

どうしたらうまく与えられるのか悩む。しばらくそうして、やがて頭に浮かびあがった答え通りに、焔は水を自分の口内に流し込むと、志摩の後頭部を片手でつかみ、彼が驚いているうちに開いた唇に自らの唇を押しつける。「んっ？」

志摩の熱い手が焔の肩に触れる。水はゆっくりと流れ込んだけれど、突然の水分に志摩は咳き込んだ。

「げっほ、げほっ」

「あ、ごめん」

強い力で押し返され、焔は咄嗟に謝る。志摩はしばらく咳き込んで、ようやく落ち着くと大きく息を吐いた。

「びっくりした、やるんやったらやる言うてや」

「気付いたらやってた」

「え、なにそれ。結局飲めんかったしもつかい」

「うん」

しばらくして床にグラスを置く音が聞こえ、すぐに焔の濡れた唇が触れた。薄く開かれた唇から少しづつ水が流れ込む。志摩はゆっくりと飲みこんで、口内に水がなくなるのと同時に焔の口内に舌を差し入れた。

ただのお遊びのような軽いキスをした事はあった。頬に、唇に、唇に、笑いあいながら啄ばむように、そういうキスなら幼いころに経験済みだ。友達の口から、雑誌、ドラマ、色々な媒体から得たキスの仕方はもっと難しく、

その時が来たら自分はいまよく出来るだろうか、なんて思ったこともある。まさに今、その時。なのだけれど、あの頃不安に思ったような事を考える暇などなかった。ただ逃げるように奥に引っ込む焔の舌を追いかけて、志摩は絡めた。手を動かさず、べたりと汗で濡れた焔の肌に触れる。そこに女性の柔らかさも胸のふくらみもなかったけれど、不思議と興奮は消えなかった。うつつすらと浮き

出たあばらを撫でて、彼の下半身を包むジーンズに触れた。前に移動してベルトらしきものに触れると、焔の身体がびくりと震え、すぐに手がつかまれた。拒まれたのはわかったけれど、止められそうになかった。ベルトから下に手を動かすと、ジーンズの上からでも彼の性器が膨らんでいるのがわかった。興奮してるのは自分だけではないし、この状況でもまだ彼も萎えていないのだとわかって安心した。

かちやかちやと必要以上にベルトの金属音が響いている。外で鳴く虫の声と荒くなつた二人分の吐息、布ずれの音、そのすべてが脳内の熱を上げた。心臓がどくどくと鳴る。今、焔はどんな顔をしているのだろうか。

「し、ま……」

唇が離れた瞬間に名を呼ばれ、志摩は顔を上げる。

「恥ずかしい」

小さな声が聞こえる。

「俺も」

言って笑うと、焔も笑ったような気がした。

「奥村君も」

「え？あ、……うん」

焔はゆっくりと志摩のジーンズに手を添えた。ボタンをとり、チャックをゆっくりと下げる。すぐに彼の下着が見えて、こんなのはいてるんだ、と一人思った。

「なんか、俺だけ恥ずかしい」

「なんで？」

「志摩は、見てないし」

「見えんようにしとるんは奥村君やろ？取ってもええの？」

「それはだめだ」

「え、」

志摩がネクタイをとれば、もしかしたら尻尾を見られてしまうかもしれない。焔は唇を尖らせて不満げにする志摩の下着に突然触れた。

「うわっ」

「へへ」

「おかえし」

「っ」

志摩が焔の性器に触れる。下着に包まれてはいたけれど、焔には大きな刺激に思えた。志摩の指が性器の先端をゆっくりと撫でる。すぐに指に濡れた感触があると、志摩は口元だけ笑った。

「なに」

焔はそれを見て唇を尖らせた。志摩には見えないけれど、声の調子で彼が照れている事がわかった。

「べっつにい」

「志摩だって同じじゃん」

「それ汗」

「うそつけっ」

言葉の勢いにかかせて志摩の下着をおろすと、勢いよく志摩の性器が飛び出す。焔は少し驚いて、無言でまじまじと見つめた。

「……奥村君、あんま見とつたらこれ取るよっ」

ネクタイを指さして言うと、焔は慌てたように頭を横に振った。そしてゆっくりと指を伸ばすと、性器の先端に優しく触れる。

「どうしたらいいの」

「いつも自分にしとるみたいにしたら？」

「……ああ」

「俺も同じようにしたげる」

焔は指をどけ、性器をゆっくりと握った。そして優しく

全体を扱く。志摩の手が同じように焔の性器に触れ、同じように動く。焔は唇を薄く開け、小さく息を吐いた。ぞわりと背中を快感が走り抜ける。他の誰かにされることなど初めてで、その事実だけで興奮度が増している気がした。全体を幾度か扱くと、やがて先端に透明の玉が出来て、それを指で撫でつけると志摩の身体が震えた。彼が感じてくれているのだと知ると、心にゆっくりと満足感が広がるのがわかった。

「あ、」

全く同じように動く志摩の指が、焔にも同じように快感を与える。思わず口から零れた少し高い声に、焔は自分で驚いた。

「なに、その声」

「んだよ」

「かわええ」

「うるさい」

「ちょ、つと、」

焔が強くと志摩の性器を扱くと、彼はあいているもう片方の手で焔の手首を掴む。

「すぐイくからゆっくりっ」

「別にすぐでも俺はいいよ」

「俺はよくない」

志摩の上半身が動いて唇が焔に近づく。伸びた舌が触れたのは焔の下唇で、そこは違う、と笑う前に、すぐに唇が塞がれた。少し前までそうしていたように、舌が口内に入り込む。絡めた舌を吸われると、志摩は止めていた手を動かして、焔の濡れた性器を撫でた。

「ん、んっ」

志摩の性器を握る手がびくびくと揺れた。焔は自分の快感に夢中になるのをなんとか抑えて手を動かす。けれど

志摩の手が生み出す快感が大きくて、すぐに手が止まってしまう。

「し、まっ……ん、ま、っ……て」

「いや」

優しく下唇を噛まれ、性器の先端を指がえぐり、すぐに全体を強く扱かれる。志摩の手首を握むけれど彼の動きは止まらなくて、焔はそれならせめて、と握った志摩の性器にも同じように強い刺激を与えた。

志摩の唇から小さく声が漏れる。ネクタイの裏で閉じていた瞳に少しの光を感じて、志摩は目を開けた。ほんの少しずれたネクタイの向こう側に、頬を紅潮させた焔の顔があった。薄く開いた瞳は涙で濡れている。こめかみを流れる汗が顎を伝い落ちる。

「あっ、志摩、も、」

「うん」

焔の唇は赤く、薄く開いて、言葉の後に彼の舌がゆっくりと自分の唇を舐めた。

（うわ）

志摩は目を細め、自分の絶頂もすぐそこにあると感じた。焔の性器を強く扱き、焔の顔を見つめた。

「ん、あ、あっ……っ」

どくりと志摩の手の中に焔の精液が弾けた。

（う、わ）

目をぎゅうとつむり果てる焔の表情に、志摩も同じように焔の手の中に精液を吐きだした。

ぐに離れて、風呂にいけば？という焔の提案で逃げるように風呂場に来た。彼は後から行くといっって、志摩に手をふった。

なぜあんなことになったのだろう。今思い返しても意味がわからない。けれど、気持ちよかった事だけは確かだ。またやりたいかと聞かれたら大きく頷く自信がある。

「かわいかったし」

小さく咬いたはずの声は浴室に大きく響いて、志摩は顔を赤くした。

「もお出よ、……」

ざば、と両腕を持ち上げた瞬間、目の前に現れた黒い何かに志摩は動きを止めた。黒い何かは死んでいるようで、さかさまになりゆったりと湯に浮いている。そこから逃げようと身体を少し動かすと、出来上がった波でそれは少しだけ志摩に近づいた。

「……あかん」

動けない。志摩はゆっくりと息を吸い込み、叫んだ。

「おくむらく……」

おしまい





なつひ MAYA+



いっただき
まーす

わーい



……
たけのこは？

1個しか
買ってへんもん



……
たけのこ

……
おれはたけのこ
買いたくさ





…びびり
強くなった
かな？

待って
待って

はな
言わな

だ
あーヤッペ
溶けてきた

こん食い方
アホらしな







なんや
今まで気付かへんかったん？

そんなとこ
触りたがるのは

志摩だけ
だからな

っん
っん



因みに
変態ランキング
二位だからなお前

「エー中絶半断やむ...
一位は？」

メフィスト

ああな...

なんや可愛いらしいし
いつそのまんま俺だけに
懐いてくれてもええんやけど...

もみ

もみ

もみ

もみ

ひびき
やめれ!!



何でもないっ、
何となく

なんでで…



お前はなんで
俺のこと平気なんだよ

おれや



…だせエ

お前何となくとか
面倒くさいとか
多すぎなんだよ

ほんまは
奥村くんが
可愛いらしいから

ハイ?



行くときは
行ける男や

あ



せやけど 世界中の男が
奥村くんや坊みたいに
ビシツとしてたら
おかしーやろ?

それに俺かて





音の絨魔師 FANBOOK

志摩×焔

千の言葉と二人の秘密

